

平成 30 年 8 月 30 日現在

機関番号：34407

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380263

研究課題名(和文) ピエール・プレヴォの経済学と啓蒙期ヨーロッパの知的ネットワーク

研究課題名(英文) Pierre Prevost's political economy and intellectual network in the Age of Enlightenment

研究代表者

喜多見 洋 (Kitami, Hiroshi)

大阪産業大学・経済学部・教授

研究者番号：30211197

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：ピエール・プレヴォの考える政治経済学は、一言でいえばスミスの影響を受けた自由主義経済学である。プレヴォは、経済的自由を重要と考え、経済的規制に概して批判的であった。彼はスミスを深く尊敬し、『国富論』が大変独創的な著作であると考えていた。プレヴォの経済学は、D.ステュアートの影響を受けながら、スミスの自由主義経済学を受け継いだ。さらに彼は、マルサスの人口論をそれにつなごうと努力していた。プレヴォの経済学は、彼の同時代の知的ネットワークをうまく活かし、18世紀の経済学と19世紀の経済学をつなぐ役割を果たした。

研究成果の概要(英文)：Pierre Prevost's political economy is, in a word, liberalist political economy being influenced by Smith. Prevost generally thought economic freedom as important and was critical of regulation. He respected Smith deeply and considered that 'the Wealth of Nations' was the great original work.

His political economy had inherited Smith's liberalist political economy, being influenced by D. Stewart. And furthermore, he was trying to connect Malthus's theory of population with it. By making good use of intellectual network in those days, Prevost's political economy played the role connecting the 18th century's political economy and that of 19th century's.

研究分野：経済思想史

キーワード：ピエール・プレヴォ 啓蒙 知的ネットワーク ジュネーヴ マーセット 『人口論』 仏訳 D.ステュアート 『ビブリオテーク・ブリタニク』

1. 研究開始当初の背景

「ピエール・プレヴォの経済学と啓蒙期ヨーロッパの知的ネットワーク」と題したこの研究は、18世紀末から19世紀はじめにかけてジュネーヴのアカデミーの哲学および物理学の教授であり、拡大市参事会、代表評議会のメンバーとしてこの都市の政治にも少なからず関与していた知識人ピエール・プレヴォの経済学について、ヨーロッパの規模で広がっていた当時の知的ネットワークとの関連を意識しつつ解明しようとするものであった。

研究開始当初の状況を振り返ると、そもそも日本だけでなく欧米でもプレヴォについての経済思想史的研究は、ほとんど見られず、ましてや彼の経済学を研究する際に知的ネットワークを手がかりとするものはまれであった。わずかに哲学、科学史等との関連でプレヴォを付随的に取りあげた研究が散見される程度であった。けれども研究代表者は20世紀末、フランス語圏スイスのジュネーヴ大学に客員助教授として留学する機会を得て、当時はまだその重要性がほとんど意識されていなかったジュネーヴ図書館が所蔵する18～19世紀のジュネーヴの知識人たちが残したマニュスクリプト、書簡等にじかに接することになった。そして、その成果の一部を“Trois lettres inédites de Jean-Baptiste Say à Pierre Prévost”(『日仏経済学会BULLETIN』第20号、2000年)として発表している。そのため、研究代表者は以前から、18～19世紀経済思想史研究におけるプレヴォの重要性を認識していた。

そのうえ、平成15～18年度には研究代表者として「スイスの視点から見た西欧経済学の展開についての経済思想史的研究」と題する研究(基盤研究(C)15530133)を行ない、平成19～21年度には「啓蒙思想と経済学形成の関連を問う グローバルな視点から」(基盤研究(A)19203011)と題する研究に研究分担者として参加した。さらに平成23～25年度には「野蛮と啓蒙 経済思想史からの接近」(基盤研究(A)23243036)と題する研究に研究分担者として参加している。そして、これらの研究をつうじて、イギリス、フランスといった国民国家の枠組みにとらわれず、ヨーロッパの視野で当時の知識人たちの知的ネットワークに注目することの意義を実感していた。

以上の点を総合的に勘案し、「遅れてきた啓蒙思想家」とも呼ばれて、研究領域、人脈ともにきわめて幅広く、その知的活動も啓蒙期のヨーロッパ規模の知的文脈のなかでとらえるのに適した人物でありながら、これまでほとんど研究されてこなかったプレヴォの経済学を同時代のヨーロッパの知的ネットワークとあわせて研究する必要があると判断したのが本研究を開始した当初の背景である。

2. 研究の目的

この研究は、1.で述べたような研究開始当初の状況を背景としつつ、ピエール・プレヴォの経済学を取りあげ、その形成、発展について、イギリス、フランス、スイスといった国の枠組みを越えてヨーロッパの規模で広がっていた当時の知的ネットワークとの関連を意識しつつ解明しようとするものであった。但し、ここに言う「ヨーロッパの規模で広がっていた知的ネットワーク」とは当時の知識人たちが作り上げていたネットワークだけを意味しているわけではない。もう少し広い意味で、この時代に国境を越えて活発に活動していた出版業者や銀行家等、さまざまな形で知的情報の流通にかかわって、当時の啓蒙期知識人たちの活動を直接、間接に支えていた人々のつながりをも含んで考えており、これと「遅れてきた啓蒙思想家」ともいべきプレヴォの経済学の形成、発展を連関的にとらえ、その総体を明らかにしようとしたものであった。

プレヴォを取りあげたのは、一つには彼が18世紀から19世紀にかけての西欧経済学の展開を考える場合に、非常に興味深い、微妙な存在だったからである。すなわち彼の経済学は、ヨーロッパ大陸のフランス語圏の経済学でありながら、アダム・スミスやドゥガルド・ステュアート、T.R.マルサス等のイギリス経済学の影響を少なからず受けている。しかもその一方で、19世紀前半のフランス語世界の経済学を考えるとときに重要な存在であるシスモンディは、彼の教え子であり、彼はシスモンディに大きな影響を及ぼしていると考えられるし、19世紀前半のフランスの代表的経済学者であるJ.-B.セーにしても、父親や叔父はジュネーヴ出身で、セー自身もまたプレヴォと知的交友関係があったからである。

そのうえ、プレヴォは、18世紀中葉から90年近くを生きて、フランス革命からナポレオン帝政、七月革命後のヨーロッパ世界まで経験しており、知的活動の期間も非常に長い。彼自身が「遅れてきた啓蒙思想家」ともいえる存在であり、直接的で深い知的交流だけでもルソー、ネッケル、フリードリヒ大王、ドゥガルド・ステュアート、マルサス等ときわめて広い範囲に及んでおり、啓蒙思想と経済学の関係を考える場合にうってつけであった。また彼の幅広い交友関係は、当時の知識人たちのグローバルな知的ネットワークの視点から西欧経済思想の交流、展開の状況を分析するにも好都合だったのである。

本研究ではこうした理由からプレヴォを取りあげ、彼の経済学について大きく初期、中期、後期と区分して彼の経済学の形成、発展を連関的にとらえ、その総体を明らか

にしようと努めた。これにより、従来の経済思想史研究においてあまり解明されていなかった西欧経済学の交流と展開の新たな側面に光をあて、ともすればイギリス古典派偏重となりがちであった従来型の経済思想史研究に見られるバイアスを是正することがこの研究の大きな目的であったからである。

さらに、この研究のもう一つのポイントはプレヴォの時代のヨーロッパにおいて形成されていた知的ネットワークへの注目であった。この時代の知的ネットワークについて当時の書籍や書簡、マニュスクリプト等の資料を利用し、出版業者や銀行家の活動にも注意を払いながら検討し、ネットワークがいかに機能してどのような特徴を持っていたのかを明らかにすることもまた研究の重要な目的であった。

そして、上に述べた目的のもとづいて行なわれた研究を総合して、必ずしも十全なものではないにせよ、プレヴォの経済学と啓蒙期ヨーロッパの知的ネットワークについての全体像を明らかにしたものが本研究である。

3. 研究の方法

本研究では経済思想史における内外のこれまでの研究成果をふまえ、プレヴォの経済学について研究を進めた。但し、プレヴォの経済学どころかプレヴォの哲学や社会科学に関する先行研究さえ乏しい状況から、一步一步試行錯誤しながら進んでいくというのが実態であった。

プレヴォ本人は、1751年に生まれ1839年に亡くなるというように当時としてはかなり長命で知的活動を行なった期間もアンシャン・レジム期から七月革命後まで長期にわたっている。しかも、ジュネーヴという国際的で、知的情報の交流が活発に行われる都市で暮らした期間が長かった。そのため、本研究では彼の経済学を「初期」、「中期」、「後期」と分けて検討した。

初期とは、プレヴォが一人前になり知的活動を開始してから、ジュネーヴがフランスに併合(1798)されるまでの時期である。この時期の彼の経済に関連した文献として、『現代の政府の経済と比較した古代の政府の経済についての論考』(1783)、『金融問題についてジュルナル・ド・ジュネーヴに宛てられた三通の手紙』(1789)、『ジュネーヴ、平等、独立、自由』(1793)の三つを取りあげた。いずれも、これまで取りあげられていない文献なので、逐次的に行論をたどることになった。なおこれらの著作に加え、プレヴォが行なった翻訳であるスミスの『哲学論文集』仏訳(1797)に収録されたプレヴォ自身の論稿「スミスの死後に刊行された著作の私の翻訳の後に付けられた考察」も利用した。

中期とはジュネーヴがフランスに併合されていた時期(1798-1813)である。この時期の経済に関連した文献としては、まず彼が当時ジュネーヴで発行されていて、彼自身もその編集、発行に関わっていた雑誌『ビプリオテーク・ブリタニク』誌上に発表した多くの翻訳、論稿を挙げることができる。また、この時期彼は、T.R.マルサスの『人口論』原著第四版の翻訳(1809)やB.ベル『欠乏』の翻訳(1804)を出版しており、前者に付けられた「訳者の序」、「訳者のいくつかの考察」や後者に付けられた「序文」は、プレヴォのこの時期の見解を示す興味深い文献であり、これらが中期に関する研究が立脚する主要な文献となった。

後期とはナポレオン体制崩壊以後、彼が亡くなるまでの時期である。この時期、プレヴォのいるジュネーヴはフランスへの併合状態を脱して独立を回復し、スイスに加わる。イギリスではリカードの『経済学および課税の原理』(1817)やマルサスの『経済学原理』(1820)が出版され、フランスでもナポレオン体制下で沈黙を余儀なくされていたJ.-B.セーの『経済学概論』の新しい版(1814、1817、1819)が出現する。プレヴォの周辺でも彼の義妹であるマーセット夫人の『経済学対話』(1816)やシスモンディの『経済学新原理』(1819)が出版されている。これらのうちプレヴォが当時、大きくかかわっていたのは、マーセットの『経済学対話』のフランス語世界への紹介とマルサス『人口論』仏訳の新版(1823年)である。前者については、プレヴォ自身が1816年に『ビプリオテーク・ユニヴェルセル』誌でこの著作を紹介しているし、後者については新たに「訳者の最後のノート」という論考を追加している。これらが後期に関する研究が立脚する主要な文献となった。

一方、上の研究と並行して行われた当時の知的ネットワークに関連した研究は、プレヴォの経済学自体の研究とは異なり、研究の特性上ずっと多様な資料を用いることになった。当時の書籍が重要な拠り所となったのはもちろんであるが、ネットワークの分析には、それに加え同時代の書簡やマニュスクリプトが大きな役割を果たすことになった。

とりわけ、プレヴォの生まれ育ったジュネーヴのジュネーヴ図書館およびジュネーヴ文書館が所蔵する書簡、マニュスクリプトは有益であった。具体例をあげれば、ジュネーヴ図書館が所蔵するダニエル・ドゥラロッシュがプレヴォに宛てた1800年代の書簡などは、プレヴォとセーの関係の従来注目されていなかった側面に光をあてるものであった。ドゥラロッシュはジュネーヴ出身の医者でセーの叔父にあたる人物であるが、彼がプレヴォに送った手紙はセーとジュネーヴ人脈の関わりを示す点で大変興味深い資料となっている。

また、本研究開始時点ではまったく想定していなかったことであるが、現在フランスで刊行中の新しい『ジャン＝パティスト・セー全集』の編纂にともなって J.-B. セーの孫にあたるイポリット・コントの蔵書印が押された本の調査が一昨年から全世界規模で行なわれた。そしてこの調査を契機として、コントの蔵書印が研究代表者の私蔵する本にも押されていることが確認され、それが本研究で問題にしている知的ネットワークの機能、特徴の一端を示していることが明らかになったのである。

要するに、この研究はプレヴォの経済学の形成、発展の過程を、同時代の様々な資料が明らかにする知的ネットワークのなかで捉えたところに方法上の最大の特徴があるといえるだろう。

4. 研究成果

本研究では啓蒙期ヨーロッパの国境を越えた知的ネットワークの存在を意識しつつ、この時期のジュネーヴの代表的知識人であるプレヴォの経済学について分析を行なった。このように国境を越えた知的ネットワークと経済学形成の関心に注目しながらフランス語圏スイスの経済思想を取りあげた経済思想史研究は、日本だけでなく欧米でもほとんど見られない。そのため、実際に研究を進める過程では若干の試行錯誤を重ねる結果になった。

本研究ではプレヴォの経済学、あるいは経済思想と言った方がよいかもかもしれないが、これを上述のように三期に分けて検討を行なった。

それにより明らかになったのは、まず初期については、次のことである。すなわち、もともとプレヴォの考える経済学自体、1780年代前半まではルソーの『政治経済論』を意識した政治体の統治の学の域にあった。だがその後、1990年代初めには、彼の考える経済学は、「諸国民の富の性質と諸原因についての研究」という正式書名をもつスミスの『国富論』に代表される富の科学へと変化している。そして、この変化の過程では、プレヴォが『国富論』を通してスミスの経済学を直接摂取したり、あるいは D.ステュアート経由で新しい経済学関連の情報を得たりしたことがかなり影響しているということである。

中期について明らかになったのは、次のようなことである。すなわち、この時期の彼の経済学は基本的に初期における富の理論を継承しているといえるが、そこには重要な変化も見られるのであり、その最も重要なものは人口論の扱いだった。1798年に発表されたマルサスの『人口論』に接したプレヴォは、それを『ピブリオテック・ブリタニク』誌上で紹介、翻訳するなど『人口論』のフランス語世界での普及に大きな

役割をはたしており、彼はスミスがすでに明確化、体系化していた富の理論とマルサスが提示した人口論を接合すべきだという見解に達している。

後期については、次のようなことが明らかになった。すなわち、ナポレオン帝国の崩壊後、イギリスではリカードの『経済学および課税の原理』やマルサスの『経済学原理』が出版され、フランスでも J.-B. セーの『経済学概論』の第2版、第3版、第4版さらにシスモンディの『経済学新原理』が出版された。そしてこの状況を受けて、プレヴォは新しい時代の経済学を彼なりに模索していたのであり、機械の導入のような当時の新しい変化に注目しつつも「富を増殖させる術」としての経済学が有効かつ重要なものであると考え、さらに経済学と道徳の関連に注目していたということが出来る。

そして知的ネットワークに関しては、ヨーロッパ社会に広く、深く張りめぐらされたジュネーヴ人脈があたかも地下水脈のような働きをしており、とりわけマーセット家との血縁関係がプレヴォとイギリスとの関係を一層深め、広げることにつながり、プレヴォとマルサスとの関係もそうした中から生みだされたのだということが明らかになった。

結局、これらを考えあわせると、プレヴォの考える経済学は、啓蒙期ヨーロッパの知的ネットワークを十二分に活かすとともに、経済的自由を重視しスミスの経済学を受け継いだ自由主義経済学としての性格を強く帯びていたということがわかる。そして、そこには D.ステュアートに代表されるスコットランド啓蒙の影響も見てとれるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

喜多見洋「初期 Say の経済思想 啓蒙、フランス革命との関連で」関西大学『経済論集』第67巻第3号、2017年12月、27-48.

喜多見洋「イポリット・コントの蔵書印をめぐって」『神奈川大学史紀要』第3号、2018年3月、63-72.

〔学会発表〕(計3件)

喜多見洋「啓蒙、フランス革命と初期 Say の経済思想」経済学史学会第80回大会(東北大学)2016年5月.

田中秀夫、喜多見洋「啓蒙の遺産 — 寛容・穏健・包括性」社会思想史学会第42回大会(京都大学)2017年11月.

ジャン＝ピエール・ポティエ、喜多見洋、高

橋則雄「山口茂、山口文庫、J.-B.Say－生き続ける知の遺産－」神奈川大学図書館、2017年11月。

〔図書〕(計3件)

喜多見洋『ピエール・プレヴォの経済思想』一橋大学社会科学古典資料センター*Study Series* No.71, 2015年3月, 1-34.

飯田裕康、喜多見洋 …………… 篠原久、柳田芳伸、柳沢哲也『マルサス人口論事典』昭和堂、2016年3月, 170-171.

安藤裕介、喜多見洋、黒木龍三、川出良枝 …………… P.スタイナー、A.E.マーフィー『*The Foundations of Political Economy and Social Reform*』Routledge, 2018年2月, 179-194.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

喜多見 洋 (KITAMI HIROSHI)
大阪産業大学 経済学部 教授
研究者番号：30211197